

# 特集にあたって<sup>†</sup>

国分 正義\*

## 1. はじめに

昨年2010年1月に『品質管理 事始め(ルーツを探る)』第1報を特集企画した(Vol.40, No.1:2010)。実に多くの方々からご意見をいただいたが、この中で更なる品質管理構成要素の「源流・原点(ルーツ)」掲載を望まれる声が多く寄せられた。

加えて、「IAQ(International Academy for Quality)の会長である Mr. Gregory Watson 氏から、本特集第1報の翻訳権を譲ってほしいとの要請もいただいた。品質管理を志す多くの方々の反響の大きさに驚くとともに、このような経緯から第2報の企画となった。

品質管理を構成する各要素の源流・原点(ルーツ)を探り、開発者・提唱者・導入者(ら)の熱き思いを拾い上げて、発展のプロセスを辿り、そこにはどのような意図があり、また苦労があったのか、伝えたかった事は何か、さらに現在はどうのように活用されているのかを見定めて、そこから将来の展望を予見したいとの強い思いも後押しをした。

## 2. 特集の思いとその背景

源流・原点すなわち『事の始め』を起こした先達者の労を知り、開拓精神の熱き思いと情熱を、若手、後輩、後世に伝え、未来志向の道標になることを趣旨とした。

「故きを温ね新しきを知らば、以て師と為るべし」

<sup>†</sup>平成23年8月25日 受付

\*つば品質総合研究所

連絡先：〒963-8851 福島県郡山市開成4-21-11-610(自宅)

の考えである。

例えば、「品質管理は管理図に始まり管理図に終わる」とよく言われるが、提唱者シューハートのそのモデルを日本に最初に導入した人は誰か(チーム・グループなど)で、導入時期やその時代の背景、そして普及と発展、管理図の基本となる思想、実用上の留意点と、これからの展望について知ることは、知的探究心をくすぐるものであると同時に、科学的方法論である「品質管理」を正しく後世に伝えることがわれわれに課せられた責務であると考え。

そして、導入のスタート期からどのような変遷を経て、前述のような深い意味を持つフレーズになったのか、更に知りたいと思うものである。この知的探求心の元となるものが原点(ルーツ)を知ること他にない。

## 3. 本特集の特徴と構成

『事の始め』を辿ることは、大きさにいえば、あたかも長江の源流を辿ることに似ていて非常に難しい。特に、提唱者(考案者)は誰で、何時、となると、いろいろな方々の意見の集約が必要になり、その特定が難しいと思われた。

そこで、文献調査や『事の特定』は、執筆者である専門家に委ねた。客観的視座から原点を辿っていただくことを主旨とし、歴史の事実の掘り起こし作業の中で、特に、時代考証や検証作業については多くの時間と並ならぬ労力をお掛けした。この一連の尊い作業で本特集は成り立っている。更に、単なる「お話し」ではなく、「学術誌」としての視点を入れていただいた。

願わくば、品質管理の研究者・講師諸氏の論文作成や講義教材作成支援の一助になることも本特集の特徴

としている。

構成は、「過去」「現在」「未来」の3大話を基本軸とし、さらに「過去」を2つに分けて「原点(ルーツ)」と「発展のプロセス」とし、次の4大話とした。

### 基本構成

- (1) 原点(開発・提唱・誕生のその時、その背景)
- (2) 発展のプロセス(障害の打破と苦労話・秘話等)
- (3) 成長の要因と現状(今起きていること)
- (4) 今後の展望(執筆者の熱き思いと後世への伝承)

原点(ルーツ)を探る事を主旨としているので、多くの紙面を、(1)原点に置き、ここにこだわった。さらに、事実のみを積み上げることを第一義に、客観性を執筆の基軸とした。

## 4. 取り上げた項目(品質管理の構成要素)

第2報で取り上げた項目選定についての基本資料は、本特集の第1報(Vol.40, No.1:2010:参照)に加え、下記の資料を参考として、さらに読者諸氏からの要望をも踏まえ、学会誌編集委員会で決定した。

益田昭彦(2002):“図・1 産業の栄養となる技術の卵,” 品質, 32, [3], p 7.

取り上げた項目(品質管理の構成要素)については「◆システム系, ◆概念系, ◆要素技術系」に分類した。なお、全体把握の重要性も鑑みて前回の特集第1報で取り上げた項目も対比の形で掲載する。

### 前回掲載分

第1報(Vol.40, No.1, 2010)2010年1月15日発行

◆システム系	◆概念系	◆要素技術系
①方針管理	①重点指向	①QC七つ道具
②日常管理		②新QC七つ道具
③トップ診断		③QCストーリー
④機能別管理		
⑤QCサークル		
⑥品質保証体系		
⑦初期流動管理		
⑧品質機能展開		
⑨DR		
⑩デミング賞		
⑪品質月間		

### 今回掲載分

	◆システム系	執筆者
①	ISO 9000 シリーズ	久米 均氏
②	JIT(ジャスト・イン・タイム)のルーツを探る	伊藤要蔵氏
③	箱根「品質管理シンポジウム」事始め	三田征史氏
④	品質管理セミナー・ベーシックコース誕生のいきさつ	三田征史氏
⑤	TGR(TQC Research Group)	飯塚悦功氏
	◆概念系	
①	源流管理	清水祥一氏
	◆要素技術系	
①	多変量解析と品質管理	吉澤 正氏
②	実験計画法のルーツ	永田 靖氏
③	シューハート管理図	仁科 健氏
④	FMEAの原点を探る	益田昭彦氏
⑤	FTA(故障の木解析)	宮村鐵夫氏
	構成要素 全11項目	

今回の第2報では、わが国の品質管理発展の歴史からすれば比較的新しい項目(品質管理の構成要素)も取り上げた。新しい概念や運動論が、まさに時代と格闘したからである。品質管理歴史の事実の掘り起こしと積み上げ過程の『源流の一滴=事の始め』においては重要であり、残しておきたい事実である。

客観的視座と事実の掘り起こし・積み上げ、そして、時代と格闘したそのものが持つ魅力の復元が、本企画の柱である。

## 5. 結語

品質管理の最初の一滴【源流・原点(ルーツ)】をくみ取り知れば、愛着も湧き、理解も深まり、愛おしくなるかとも思われる。ここから後世に正しく伝承する気持ちが生まれてくる。品質管理の更なる発展と活性化もこの「原点を知る」ことから始まるものと確信をしている。